

令和元年6月27日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16450

研究課題名(和文)19・20世紀イングランド社会とプロ・フットボールのガバナンス

研究課題名(英文)The Governance of Professional Football in 19th-20th Century England

研究代表者

藤井 翔太(FUJII, SHOTA)

大阪大学・経営企画オフィス・准教授

研究者番号：80738964

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では1980-90年代のイングランドにおけるプロ・フットボールのガバナンスについて検討した。特に、先行研究によって殆ど考察されてこなかった研究者の改革への関与とその影響を明らかにした。規制・介入を主とするリーグ全体のガバナンスから、よりミニマムな個々のクラブレベルのコーポレート・ガバナンスへと変化していく中で、スポーツ・ガバナンスやスポーツ・マネジメントなど新たな学術研究が発展したことを明らかにした。

また、プロ選手のイメージの変遷について19・20世紀転換期～戦後期にかけて分析し、理想的なプロ選手像についても、徐々に個々の選手の才覚を重視するようになっていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって19世紀末～21世紀初頭までの約100年強を一気通貫するプロ・フットボールのガバナンスに関する通史を描くことが可能になった。スポーツ団体のガバナンスが問題とされる機会が増え、またesportsなど新たな形態のプロ・スポーツ産業の勃興が観られる現在の状況に対して、その発展・問題の歴史的背景を明らかにすることでより長期的な視点に立ったsustainableなスポーツ文化の発展に寄与する視点を提示することが出来るだろう。また、実際の改革と学術研究の発展を関連付けながら明らかにしたことで、今後のスポーツ関連研究の意義に対する示唆を与えることが出来るだろう。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the governance of professional football in England 1980-2000. Especially, I examine how researchers of sport had engaged in and given influenced on the reform of professional football in the 1990s. Through the analysis, it can be shown that the governance of professional football was totally changed after the discussion in Football Task Force in 1997-2000: from regulation to mutualism. In addition, such a change led to developing new academic research in sport science, such as sport governance and sport management, which could help professional clubs promote corporate governance.

研究分野：スポーツ史

キーワード：スポーツ史 フットボール ガバナンス イギリス 西洋史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、19・20世紀イングランドにおいて、娯楽産業として成立、発展を遂げたプロ・フットボールの歴史について、主にそのガバナンスの変化について産業内外のアクターの影響力に焦点を当てて考察を行なった。

研究者はこれまで19 - 20世紀転換期、戦後期(1946~63年)を対象にプロ/フットボールのガバナンス研究を行ってきたが、本研究では以下の観点から研究を行なった。

(1) 1980~90年代のガバナンス史研究

スタジアムの老朽化、入場者数の減少、フリーガン問題など未曾有の危機を前に、プレミアリーグの設立、有料衛星放送(BSyB)の開始など、ガバナンス・収益構造の大改革を実行した当該期の改革に焦点をあてて検討することで、1世紀におよぶイングランドのプロ・フットボールの変化、歴史的意義について従来の研究から一気通貫して1世紀に及ぶ歴史を記述することに繋がる。また、ガバナンス研究の観点からみても、サポーターの主体的関与が大きくなる当該期の研究を進めることで、よりダイナミックなガバナンス史の描写に繋がると考えた。

(2) プロ・フットボール選手のイメージ変化

ガバナンスの変化に焦点を当てると同時に、プロ・フットボール選手のイメージがどのように変化したのか併せて考察することで、プロ・フットボールという新たな産業がどのように変化したのかより詳細に検討することに繋がると考えた。イメージ研究については、1980~90年代に限らず、世紀転換期から戦後期についても考察対象とした。

以上を総合することで、ガバナンスという従来の日本におけるスポーツ史研究においてほとんど取り組まれてこなかった観点から、1世紀におよぶイングランドのプロ・フットボールに関する通史的研究を打ち立てることを目指した。

2. 研究の目的

本研究では主に以下の点を明らかにすることを目指す。

(1) 1980から90年代のガバナンス史研究について

主に1989年のテイラー報告、1992年のプレミアリーグ設立、そして1997~2000年のFootball Task Forceの活動に焦点を当てながら、プロ・フットボールのガバナンスが以下に変化したのかを明らかにすることを目指す。その際には、競技統括団体であるFootball Association(以下FA)やFootball League(以下リーグ)といった業界内部のアクターのみならず、政府、メディア、サポーター団体、研究者など外部のアクターの果たした役割に焦点を当て、諸アクターの関係性・影響力の変化の諸相を「ガバナンス」概念によって捉える事を目指す。特にこれまでの先行研究では殆ど考察されてこなかった同時代に新たに勃興したスポーツに関連する諸科学研究の直接的・間接的な役割と影響力を明らかにすることで、プロ・フットボールの持つ社会的意義についてより多角的な視野から明らかにすることを目指す。

(2) プロ・フットボール選手のイメージ変化について

労働者としての性質が強い新たなProfessionalの形式であるプロ・フットボール選手の自己・他者イメージの変遷をたどることで、(1)におけるガバナンス研究を補足して、プロ・フットボールのイングランド社会における歴史的意義・コンテキストの変化を豊かに描き出すことを目指す。

3. 研究の方法

本研究における方法として特徴的な点は以下の通りである。

(1) ガバナンス概念の利用とアクターとしての研究者への着目

本研究では単に制度的な変遷や、議論の内容を検討するのみならず、Mark Bevirのガバナンス研究(Key Concepts in Governance, New York: SAGE, 2008)を参照しつつ、産業内外のアクターの関係性の諸相がどのように変化したのか、財政構造の変化と関連付けながら考察する点に特徴がある。

また、先行研究においてあまり検討の対象とされてこなかったアクターとして研究者に着目した。当該期の改革には経済学者、経営学者、社会学者など多くの研究者が直接的・間接的に関与していたが、多くの先行研究は研究者自身がアクターとして直接改革に携わる事も多く、研究者の存在が改革に与えた影響や、改革の影響を受けてスポーツ関連研究がどのように変化していったのかについて十分な検討がなされているとはいえない。そこで本研究では、研究者の存在に焦点を当てた分析を行なう。

(2) 検討史料について

本研究ではメディア史料(主に新聞・雑誌) 同時代の研究文献の使い方に特徴がある。メディア史料に関しては、従来の研究では歴史的事実を再構築する目的で利用されることが多かったが、本研究では各アクターが自らの主張するガバナンスを正当化するための回路としてのメディアの役割に注目し、ロジックを析出することに特化して分析を行なった。

研究文献に関しては、二次史料としてだけでなく、当該期の改革にどのような影響を与えたのか、スポーツ関連研究がどのように変化していったのかということ考察するための一次史料としての利用も視野に入れて分析を行なう点に特徴がある。

(3) 選手のイメージ分析について

選手のイメージについてもメディアや著作を通じて分析を行なった。当初の予定ではテキストマイニングの手法を利用する事も検討したが、ガバナンス研究のボリュームが膨らんだこともあり、補助的なイメージ分析については従来通りの史料読解に限定した。

以上を踏まえて、プロ・フットボールという巨大な娯楽産業の社会的な意義について、産業内部での独自の論理が形成され、変化していくプロセスについて、外部のアクター(政府・メディア・サポーター・研究者)の関係性の変化に着目しつつ、産業としてのプロ・フットボールの社会的文脈・意義をどのように位置づけようとしたのか、明らかにすることを目指した。

なお、同様の手法は、他のプロ・スポーツのみならず、非営利的な産業、特に同時代に大きな改革が実行された高等教育などのガバナンス分析にも応用することを視野に入れて研究を進めた。

4. 研究成果

本研究は主に1980~90年代のプレミアリーグ改革において、研究者の改革・論争への関わり方とその変化を明らかにすることが出来た。特に、先行研究において指摘されてきたサポーター団体の重要性和研究者の関係性、そしてスポーツ関連研究が改革の時代においてどのように誕生し、変化してきたかを明らかにすることができた。特に、マーケティングやガバナンスの重要性が改革の中で訴えられる中で、実際の論点として浮上すると共に、スポーツ・マーケティングやスポーツ・ガバナンスという学術研究の対象として発展していく過程を明らかにした。より具体的な成果については、

(1) 80年代後半~90年代初頭におけるプレミアリーグ改革においては、衛星放送という新たなメディア・資金源の出現により、リーグ運営委員会を中心として中小のクラブの発言力が大きかった伝統的なガバナンス体制が崩壊していった。その中で、研究者達はアメリカにおいて発展したスポーツ経済学・経営学の知見を取り込みつつ、プロ・スポーツの産業としての特殊性を研究成果として発表し、プレミアリーグ設立によって上位クラブの独占を促す新たなガバナンスの方向性に継承を鳴らし続けていたことを明らかにした。(研究成果②、⑤~⑦)

その一方で、BSkyBによる放映権獲得を巡るメディア上の言説分析からは、改革推進派(サッカー協会、コンサルタントなど)と改革反対派(研究者、サポーター団体など)が共にマーケティング的知見の導入を重視しつつ、重視するマーケティング対象が両者では異なることを明らかにした(研究成果)。

(2) 90年代後半には、労働党によるプレミアリーグ改革への介入が起こり、Football Task Force(FTF)による提言がまとめられたが、その中で研究者が果たした役割について検討した。FTFにおいて、大部分の研究者が伝統的なフットボール文化を存続させるためにはサッカー協会・プレミアリーグによる規制の導入を主張したが、サッカー協会のみならず、ブレアら New Leftを中心とする労働党政府からの賛同も得られなかった。

そうした中で、ロンドン大学バークベック校に設立された Football Governance Research Centreに集った Michie や Hamil らの経営学者達は、ブレアら「第三の道」が掲げる Mutualism の原則に共鳴しつつ、サポーター団体と連携して、ローカルなクラブレベルでの基金の設立や運営陣への労働者の参画などを中心とするコーポレート・ガバナンスの導入を推進した。つまり、FTFを経ることで、プロ・フットボールにおけるガバナンスは19・20世紀転換期から続いていた伝統的な規制・介入を主とする大文字のガバナンスから、クラブレベルでのガバナンスコードの実践を核とする小文字のガバナンスへと移行するとともに、学術研究のレベルでもスポーツ・ガバナンス学などより実践的で専門家の育成を主とする新たな研究の隆盛がみられた(研究成果)

(3) プロ選手のイメージの変遷については、主に19・20世紀転換期~戦後期にかけてのプロ選手像の変化について、チャールズ・サトクリフの言説を中心に分析を行なった。サトクリフの理想とする Professionalism は、統制によるクラブや地域間の格差を超えた競争の推進を実現するためには産業内部での規制・統制も必要であるとしていた。その上で、メディアを積極的に活用し、プロ・フットボール自体の社会的な重要性を訴えるものであった。サトクリフの考えは選手個人の権利に抵触する部分もありながら、創生期から発展期のイングランドのプロ・フットボールの社会的地位の向上を支えたものであった。しかし、彼の死後、戦後期に入ると

より、国際的な競争の激化を背景に、個人の才覚を重視し、メディアによるスターを生み出すことを良しとする新たな Professionalism の理念が徐々に優位になっていった。(研究成果)

以上のように、主に研究者の研究・言説に着目しながら 1980～90 年代のプロ・フットボールのガバナンスの変化についてまとめた。特に(2)で記した大文字から小文字のガバナンスへの変化は、プロ・フットボールという産業の社会的文脈の変化を象徴すると共に、フットボール・スポーツ研究という同時期に発展した新たな学術研究分野のあり方を映し出しているといえるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

藤井 翔太、「プロ・フットボールのガバナンスとチャールズ・サトクリフの理念」、志村真幸編、『異端者達のイギリス』、共和国、2016年、218～240頁。(査読無し)

藤井 翔太、「イングランドのプロ・フットボールにおけるファン・マネジメントの歴史 - ファン/サポーターの立ち位置の変化とフットボール・リーグのガバナンス」、早稲田大学スポーツナレッジ研究会編、『ファン・マネジメント』、創文企画、2016年、31～40頁。(査読無し)

〔学会発表〕(計5件)

藤井 翔太、「20世紀末イングランドにおけるプロ・フットボールのガバナンス - Football Task Force の歴史的意義 - 」、西洋史読書会第86回大会、2018年11月3日、京都大学。

藤井 翔太、「プロ・フットボールは誰の物か? - 1992年BSkyBによるプレミアリーグ放映権獲得を巡る言説分析を中心に - 」、日本スポーツ史学会第31回大会、2017年12月3日、日本女子大学。

藤井 翔太、「20世紀末イングランドにおけるプロ・フットボールのガバナンス - 1992年プレミアリーグ設立の歴史的意義 - 」、日本スポーツ史学会第30回大会、2016年12月3日、立命館大学。

藤井 翔太、「20世紀末イングランドにおけるプロ・フットボールのガバナンス - 1992年プレミアリーグ設立の歴史的意義 - 」、近代社会史研究会、2016年6月18日、京都大学。

藤井 翔太、「イングランドのプロ・フットボールにおけるファン・マネジメントの歴史」、早稲田大学スポーツナレッジ研究会、2015年4月24日、早稲田大学。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。